

若者ケアラーの語りにみる「介護と仕事の両立」と介護離職

日本女子大学 松崎実穂

1 目的

若者ケアラー(家族の介護を担う若者)とは、子どもから成人への移行期、または初期成人期において介護を担うことになった存在であり、中高年のケアラーを想定したものとは異なる支援のあり方が必要と考えられる。しかし若者ケアラーは、介護に関する諸制度の知識や情報、頼れる豊かな人的ネットワークを持ちにくく、支援が必要な状況であっても周囲に気づかれず、困難な状況に陥ることも考えられる。日本においては若者ケアラーについて少数事例への質的調査を元にした研究成果が蓄積され、ケアを担う若者の学校や職場生活に支障が生じていること(土屋 2006; 武田 2008; 森田 2010; 澁谷 2012)が指摘されている。これらの知見を踏まえ、本報告における目的は、第一に、仕事を持つ若者ケアラーの介護経験および職業世界での経験に関する語りの分析を通して、若者世代の介護と仕事の両立や介護離職の有様を描き出すことである。次に、そうして描き出された仕事を持つ若者ケアラーの有様と、「介護と仕事の両立」に必要なとされている働き方や行動のあり方を対比し、そこに見られる齟齬について検討する。

2 方法

本報告における分析に用いるのは2014年6月から2017年1月にかけて実施した若者ケアラーへの半構造化インタビュー調査の内、家族の介護が始まった段階あるいは家族を介護中に仕事を持っていた対象者の語りを逐語的にテキスト化したものである。また調査の行程および調査データの扱いにおいては、プライバシー保護の観点から必要な倫理的配慮を行った。

3 主な結果と論点

仕事を持つ若者ケアラーは、介護が必要な家族への対応とその時の仕事とを両立するために必要と考えられる介護と仕事に関するマネジメントやコントロールをそれなりに行っており、また介護の影響によるキャリア中断や、スキルまたはキャリアアップに対する諦めといった経験は中高年のケアラーと共通する部分が見られた。しかし若者に求められる働き方とこうした介護や仕事をそれぞれうまく調整しながらの働き方との間の齟齬は埋めがたく、離職をくり返さざるを得ないケースが見られる。

また、同じ組織の中で仕事を継続しながら介護もしていくという働き方は、概ね20代から30代といった若い年齢から親の介護が始まっているケアラーには当てはまりにくい。こうしたケアラーからは、介護期間が長引く中、介護と仕事の両立に対する試行錯誤だけではなく、特に結婚・出産等自分自身の人生の形成を考えると、仕事を辞めるか変えざるを得なかったことが語られた。

本報告では少数の事例からではあるが、仕事を持つ若者の目線から見た「介護と仕事の両立」について以上のように取り上げたい。

文献

- 森田久美子, 2010, 「メンタルヘルス問題の親を持つ子どもの経験—不安障害の親をケアする青年のライフストーリー」『立正社会福祉研究』12(1): 1-10.
- 武田卓也, 2008「要介護者を支える若年介護者の直面する問題に関する一考察—あるひとり親の事例分析を通じて」『介護福祉』15(1): 74-80.
- 澁谷智子, 2012, 「子どもかがケアを担うとき—ヤングケアラーになった人/ならなかった人の語りと理論的考察」『理論と動態』5: 2-23.
- 土屋葉, 2006, 「『障害』の傍らで—ALS患者を親に持つ子どもの経験」『障害学研究』2: 99-123.